新潮文庫

虚構のクレーン

井上光晴著

新潮社

虚構のクレーン

定価140円

新潮文庫 草138 A

昭和四十四年七月十五日 印刷
昭和四十四年七月二十五日 発行

著者 井上光晴
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本所
© Mitsuharu Inoue 1969 Printed in Japan

新潮文庫

虚構のクレーン

井上光晴著

新潮社版

1896

虚構のクレーン

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

1

淀川の鉄橋をすぎると、突然焦げたコールタールのような匂いのする煙が列車の中にまいこんできて、誰かが「わあ、焼けとる焼けとる」と叫んだ。阪神国道に沿ったまっくろい街並がちょうどはりつめた一本の糸に火をつけた形で燃え上り、そのぱたぱた、ぱたぱたという炎の中を徐行しながら時々前方につんのめるような不思議な速度を出して列車は走りつづけていた。

「よう燃えるなあ、海の中に油ば流したごと燃えるなあ」と、さっき「燃えとる、燃えとる」と叫んだ男がまた九州弁で声高にしゃべりはじめ、仲代庫男と背中合せに坐っている赤襷をかけた男が「やっぱり、昼間の空襲ですやろかねえ」とまのびした声で相槌を打った。その男は、東京からの列車が、大阪・名古屋方面空襲中というので岡崎駅で四時間程停車した時乗込んできて、それからは十分おき位に「間に合いますやろかなあ」と自分に来た召集令状の日時を関西弁とも九州弁ともつかぬ奇妙な間合をとった声で繰返していたが、京都駅を過ぎた頃から、どうしたのか急に頭を自分の膝に押込むようにしてだまりこくってしまっていたのである。

「便所ですかあ」仲代庫男の座席を出た通路に新聞紙を敷き、横においたトランクにへばりつく

ようにしている男がほんの申し訳程度に体をずらし、その上をものもいわず茶色のモンペをはいた女がまたがっていった。三人掛の座席の間にも余地のないほど乗客は思い思いの姿勢で蹲っていたが、なぜかあまり話し合う者もなく、疲れはてた空気が焦げ臭い深夜の車中いっぱいに漂っていた。

「便所はもう入れんよ、人が坐っているんだから」というぼそぼそとした声が入口のあたりでおこり「女だから」とか「女ですから」という意外にきんきんした声がしばらくつづいていたが、誰もふりむこうとしなかった。コールタールの匂いが今度は歯磨粉のような匂いになり、急にまた薄紫のむんむんする煙に変った。

「窓をあけろ、窓を」さっき「燃えるなあ」といった男と逆の方向から低い号令のような声が上り、仲代庫男はベニヤ板ではりつけてある窓に両手をかけた。その時、ギリギリと滑るような車輪の振動がして列車が停り、「学生さん、どこですか」と仲代の前に坐っている女がいった。

「さあ、さっき淀川を過ぎたから……」仲代庫男は窓を開けながらこたえた。

「停るところなんかじゃないのにねえ」歯ぐきを指で押さえて女がいった。東京で二度空襲にあい、二度目は歯冠を入れるため、十八金の指輪を歯医者に持って行ったとたん警報がでて、おかげで何もかもフイになったとぐちっていた三十四、五位の女で、主人は昭南に出征している将校だと問わず語りに何度もしゃべっていた。

「どうしたんだ」「どうしたのかねえ」という声があちこちで上り、車内は急に騒然となった。

「また空襲か、四時間も五時間もとめられたらかなわんなあ」「こんなとこ駅あるのんか、一体

……」列車の窓をあけた仲代庫男の眼いっぱいに崩れおちながら燃えつづける鉄骨とその真赤な煙を影のように映しだした煙突がとびこんできて、彼は何とはなしに「ああ西淀川だ」と呟いた。「兄さん、どこ」歯ぐきを押えた女の横に坐っている戦闘帽をかぶった男がやっと自分に返ったような声でいった。どうしたわけか、その男はワイシャツを二枚重ねてきこんでいて、京都からずっと眠っていたのである。「馬鹿なことしやがる」何に腹を立てているのかわからぬ口調で、その隣りに半分腰かけている男が呟き、その呟きを伝染するように、こんどは仲代庫男の隣りに坐っている男が「止っちゃ走り、止っちゃ走り、明後日頃でもつくとやろかい」と九州弁でいった。

仲代庫男は黙って赤い炎の影に浮きだされた岩本製作所という文字をみつめていた。その岩本製作所におぼえはなかったが、彼は五年前、昭和十五年春から約一年間、いま列車の窓から見える黒々とした火の地平線のようなその附近――西淀川区歌島橋の協同製鋼所という工場で働いていたのである。彼は九州西端にある炭鉱の島で高等小学校一年を終えるとすぐ夜間工業に入れて貰えるという約束で、協同製鋼所の技師をしていた米川市治（その人の弟が炭鉱の労務課員であった）の家に書生兼、見習分析工という資格で住み込むために上阪したが、本来の目的である夜間工業は上級学校進学資格のない乙種校であり、そしてなによりも耐え難かったのは、毎朝、女学校に通う同年輩の娘の靴を磨き、電車通りまで見送らねばならぬことであった。昼間は米川技師の書生だということで特に社員食堂で食べられたが、ある日カレーライスをお代りしたということで、（憎まれていた米川技師への面当てもあり）一ぺんに評判になり、彼はその屈辱に身をふるわせて、いま焼けただれる工場の道を通り、下関につづく線路の上を歩いて行ったのであ

る。

「レールの枕木が燃えよるとじゃないですか、何か臭かごたるが」仲代庫男の五年前の感慨をふたたび薄紫の咽喉をつきさす煙に充ちた車中にひきずりこむ声で隣りの男がいい、「枕木が、あなたそんなことが」と顎紐のない戦闘帽をかぶった男がこたえた。「もう何時間乗ったかわかりませんからねえ、本当に岡崎でも停ったでしょう、京都でも停ったでしょう、大阪でも一時間以上とまっていたですからねえ」と「枕木が燃えよる」といった男の横に三人掛している四十歳位の女が、通路をへだてたむこうの座席にいる国防色の服を着た若い兵曹に話しかけ、「はあ」とその兵曹が気のない返事をした。

「こんな調子で九州までいけるのですかねえ。海軍さん、佐世保まででしたねえ」浜松で掌いっぱいもらった乾パンの味が忘れられない声で女がまた若い兵曹にいった時、列車がガタンと大きく揺れて動きはじめた。

「動いた、動いた」ワイシャツを二枚着込んでいる男がいい、その声につられるように「学生さん、神戸はまだでしょうね」と仲代庫男の前に坐っている女がはずみをつけた声でいった。「さあまだ三十分位はかかるんじゃないですか」とこたえた仲代庫男と同時に、通路に新聞紙を敷いて蹲っていた男がぱっと顔をあげて「神戸でおりられるんですか」と女に声をかけた。「いや、あたしは門司まで行くとですがね、神戸は昔、弟が工場にいたもんですから」と女がこたえ、通路の男はまたものもいわず新聞紙を腰でずらした。「弟はね、もう五年も支那に行ってるんですよ。こんどの戦争が起る前の年ですからねえ、兵隊に行く時も時間がなくて神戸からまっすぐ行

って……。山路鉄工所というところに働いていたんですがねえ」

女は仲代庫男に話しかけているのだが、彼は黙っていた。五年前、彼の働いていた西淀川の製鋼所に村田チイエ（千鶴枝か千鶴か不明だが、とにかくそう呼ばれていた）という彼より五つ六つ年上の分析女工がいたが、その村田チイエが或る日、夜学に行く途中の彼を強引とも思える仕方で工場の近くの運河沿いの突堤に誘い出したことを考えていたのである。

チイエはその時、自分の兄と友達に召集が来てから、もう一年近くなると仲代に話し、彼は「なんとか中種工業の夜間にかわろうと思うとる。いま行っている大阪工科学校は乙種やさかいあかん」と覚えたての大阪弁でいった。

「うちはね、車引きのワンタン屋よ、材料少うなってしもうてこのごろさっぱりやけど」突堤を阪神国道電車の停留所の方に歩きながらチイエはいった。「ワンタンか、まだたべたことない」と彼はこたえたが、チイエと二人きりで逢ったのは後にもさきにもそれきりだった。いまベニヤ板の隙間を通して燃えつづける工場の炎の中に、そのチイエの顔と言葉が鮮烈な思いとなって蘇えってくる。「兄ちゃんの友達の青木という人はこっけいやったわ」「あんた十五にしては大人みたいな顔してるねえ」彼が協同製鋼所を逃げるようにしてやめたその日（事実彼は住込んでいた米川技師の家を無断で逃げ出したのだが）ちょうどチイエは欠勤していて、彼は同僚の原という少年に「村田さんが来たら、親切にされたことは忘れんというといてくれ」と思い切って伝言を頼んだのである。

「手洗いにいきたいけど、無理でしょうねえ、大阪駅で行っとけばよかったけど」仲代の前の女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が今度はしきりに別のことを呟きはじめた。通路にいた男はいよいよテコでも動くまいというように顔をそむけ、さっき「馬鹿なことしやがる」といった男が「いま無理だなあ、三宮か神戸でおりてするんだなあ」と言葉自体としては親切だが、ひどくつっぱなした声でいった。「男はどこからでもとばせるからいいけど女はねえ」その男の前の四十女はなぜかはしゃいだような調子でその言葉を受け、「本当に大阪でしとけばよかった」と仲代の前の女が両手で歯ぐきをいじりながらくり返した。

いまにも揺れおちるような光線で車内灯がぼんやりとした隈をその女の顔半分に作り、「のろのろしているなあ、レールが焼けたのかもしれんなあ」と誰かが呟いた時、その呟きをハミングするように、オウオウという音がきこえ、突然鋭い汽笛を三度たてつづけに鳴らして列車のブレーキがかかった。と、同時にオウオウというどこか遠い所から聞えてくる音が「窓をあけてくれ」「乗せてくれ」という荒々しい声になり、「避難民を入れろ」と、裂くような悲鳴がベニヤ板の窓にすりよせていた仲代の顔を直接叩きつけた。

「避難民だ、窓をあけてくれ」「乗せてちょうだい、もう三時間もここに待っているんですから」「おい、窓をあけんか、窓を」「ぶち破るぞ」「乗せてえ」「おねがいします、乗せて下さい」「空襲で焼けだされたんだ、入れてくれ」「たのむ、入れてくれ」口々に叫ぶ声がブレーキをかけた列車をとりまき（ホームの反対側からもその叫びはおこっていた）そのすさまじさに押されて、二、三の乗客が窓をあけようとした時、仲代庫男の坐っている座席の斜前方から「おいあけるなっ、窓をあけちゃいかんぞ」という声が上った。

国民服を着てゲートルを巻いた五十年輩の男で、その男はつづけて「窓をあけちゃいかん、これ以上乗せたらそれこそ列車は動けんようになってしまう。われわれも戦災者なんだ、あけちゃいかんぞ」と中学生にでもいうような口調で叫んだ。

「ここどこですかねえ、こんなところに駅あるんですか」ガンガンと叩く窓の外の声をはぐらかすように仲代の前の女はひとりごとをいい、「汽車が動かんと入隊が間に合わんからなあ」と彼の背後で赤襷をかけた男がいった。

「あけてくれ」「もう乗れないよ」「乗れないということがあるか」「乗れんよ」「窓をあけろ窓を、網棚の上にだって乗れるんだ」「あけるな、一人乗せたら最後だぞっ」また国民服の男が叫んだ。

「日本国民じゃないか、焼け出されたんだから乗せてくれ」という声と同時に仲代庫男の窓硝子が今にも割れそうな勢いで鳴り、柳行李を背負った男の顔がその窓硝子に威嚇するようにぺったり寄せられていた。その「日本国民じゃないか」という声にひっかかったらしく、逆にその声を無視して隣の男が「駅ですか」と仲代にたずねた。

「ええ、神崎大橋らしいですよ、尼ヶ崎ですね、ビール会社のあるところですよ」仲代はこたえ、つづけて「もう入らんからなあ」と自分に弁解した。その時、隣の硝子窓にびっびっとちょうど障子紙を裂くような音をたててひびが入り、「あっ、ぶっつけやがった」と通路の男が指さした。それを合図にしてあちこちのベニヤ板と硝子窓が外から激しく打破る勢いで叩かれ、破片のとぶ危険を避けて、二、三の窓が開かれたが、その窓からおし入ろうとする者、それを拒もうとする者で、忽ち車内は怒号と悲鳴の渦に巻込まれた。

「ひどいですねえ」仲代の前の女は、その開いた窓から離れていて助かったという口調で呟き、「焼けだされたんですね」とワイシャツ二枚の男が同じ調子でいった。鋭い尾を引くような警笛が鳴り、「危いぞ、窓をしめろ、汽車が動くぞ」という国民服の男の叫びを仲代庫男は自分自身の気持にだめを押すような思いで聞いた。彼の坐っているベニヤ板の窓の向うで、さっきから「あけて下さい」「あけて下さい」と執拗にくり返される若い女の声から一時も早くのがれたかったからである。汽笛が鳴り、「あけて下さい」という声がまたくり返された。その声を聞いたのか聞かぬのか「あけたら駄目ですよ、共倒れですよ」とひとごとのようにいう隣りの男の声に半分ほっと責任を転嫁する気分になり、仲代は「もういっぱいでとても乗れないですよ」と窓の外に向っていった。

汽笛がまた長く今度は少し尻細に鳴った。「のせて下さい、荷物も何も持っていないんです」女が仲代の声にすがりついた。ベニヤ板の隙間からその女の顔がひどく飢えたものに見え、仲代はその迫るような表情から目をそむけた。すると、汽車がびっくりするような揺れ方で動き出し、その瞬間、仲代はベニヤ板の窓をあけてしまったのである。なぜそうしたのか自分でもよくわからなかったが、女がさっと体を乗り入れ「よかった」と息をついた時、仲代は何に対してかいいようもなくはずかしい気がした。仲代と同年輩の、二十になるかならぬ位の女であった。

「本当にありがとうございました」若い女はいったが、仲代は返事をしなかった。彼の前の女が「危いねえ」と顔をしかめ、「ねえちゃん儲かったな」と通路に面して三人掛している男がいった。彼女が意外に若かったことがその座席の人々の気分を別のところにそらすことになり、「どこも

坐るとこないよ、この腰掛の間にでも坐っときなさい」とさっき「共倒れ」といった男が、自分の膝をまきこんで、座席と座席の間の床をあけた。「窮屈ねえ」と歯ぐきをおさえた女が足をまげたが、仲代は黙っていた。

列車はかなりの速度を出しはじめ、人々は少し解放された気分になった。

「ねえちゃんも焼けだされたロか」端に坐っている男がいった。

「ええひどかったですわ。夕方からずっと燃えつづけよ」若い女はやや青ざめた顔をあげてこたえた。小さく尖った鼻の先に黒い油のようなものがついていたが、彼女はそれに気がつかないらしく、声だけが元気だった。

「動員で行っていたんですけど、はじめその工場が燃えて、かえってみたら、下宿まで丸焼けなんです。だからこんな荷物もなにもなくて……」若い女はつづけた。

「ねえさん、学生ですか」仲代の隣の熊本まで行くという男がいった。

「ええ、薬専です。大阪の……」

「薬専ですか、そんなら木須とも子というの知りませんか、僕の親類ですが」仲代庫男はいった。

「木須という人、佐賀の方でしょう。上級生で顔は知っていますが、話したことはありません」女子学生はいった。

「学校は……東京の学校ですか」と、しばらくして女子学生はきいた。

「ええ」仲代は曖昧な返事をした。彼はいまある私立大学の専門部と工業専門学校の両方に籍を

おいていたが、その名前をいうことが女子学生に対してひどく屈辱的なものに感じられたからである。彼の着ている学生服のボタンはただ「学」という字の彫ってある黒い木製の統制ボタンで、帽子はかぶっておらず、ただそれだけではどこの学校か不明であったのである。

「中野にいたんですが、すっかり焼けだされてしまって」仲代はその曖昧な言葉につづけた。

「まあ、あなたもやられたんですの」女子学生はいった。

「ここに乗っているのは誰も彼もですよ」仲代の前の女が言葉をはさみ、それからまた「濁酒一升十円というのはいくらなんでも高いですよ」と別の話に割り込んでいった。

「けれどもよかったわ、乗せてもらって。乗せてもらえなかったらどうなることかと思っていたんですよ。戦災証明書もなにもないけど、とにかく汽車にさえ乗れればなんとかなると思って」女子学生は急に現実に引戻されたような顔になった。

「通れませんよ、駄目ですよ、便所はいっぱいだ」という声が便所に近い通路でおこり、赤ん坊が急に火のついたように泣き出した。

「あーあ、大阪でほんとにしとけばよかった。学生さん、神戸まで大分ですか」前の女はその赤ん坊の声に苛だつようにいった。

それからしばらく経って列車は三宮駅に五分、神戸駅に約七分間停車したが、仲代の前の女は便所にいくことができなかった。車中は身動きもならず、またいつ発車するかわからなかったので窓からとび出して用を足すことができなかったのである。

「もういいよ、ここでしかぶるわけにもいかんから私いってくる」といって女が立上った。通路

の男が、「便所に何人も坐っているんだよ」といったが女はかまわずその男の肩を越え、女子学生がものもいわずその女の後につづいた。

「だめだめねえちゃん。今度駅につくまで我慢するんだな」端の男が顔を上げ、何がおかしいのか若い兵曹がははと笑った。先に行った女は二人か三人の頭を越えぬうちに「おい、無茶すんなよ、お前一人じゃない、誰だって我慢しているんだ」とたちはだかられ、またぶつぶついいながら戻ってきた。

「窓からやれ、窓から」通路にいる皺だらけの作業服を着た男がいった。この男は東京駅を列車が出たとたん乳のみ児をかかえた女に「すみませんが一個でよろしいから売っていただけませんか」とねだり、「売るようなものはないのですが」と嫌な顔をされても、乞食のようにじっと手を差出してにぎりめしをひとつせしめていたのである。

「窓から女がどうしてできるもんですか」もう冗談もいえぬといった顔つきで女が坐った。

「長崎の女学校は県立ですか」仲代庫男はいった。「ええ」女子学生はこたえた。

「西山のあの女学校なら僕は何度も行ったことがありますよ」彼は便所に行きたい女学生をなぐさめていたのだ。「試験を受けに何度も通っていたんですよ。ほらピアノのおいてある音楽教室があるでしょう」

「試験？　高商のですか」

「いや高商じゃない、検定試験です。ちょうどあの女学校が試験場だったものですから」

「もう少し通路の人だってゆずり合ってくれればいいのにね」女はいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com